

朝顔の季節

夏を代表する花といえば、朝顔を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。小学生のころに朝顔の栽培を経験されているかと思います。日本各地で朝顔市が開かれます。身近な夏の花、朝顔についてまとめてみました。



○朝顔の出身は

朝顔は日本原産の植物ではありません。原産地は中南米といわれていて、そこから世界に広がったとされています。日本には中国から約1200年前の奈良時代(800年頃)に渡来したと考えられています。当時の種子は「牽牛子(けんごし)」と呼ばれており、下剤の効果を持つ漢方薬として用いられていました。朝に花を咲かせることから「朝顔」と名づけられたという説がありますが、当時は朝顔以外にも朝に花を咲かせるキキョウやムクゲなどの植物全般をまとめて呼んでいたともいわれます。平安時代になり、1164年に平清盛によって厳島神社に納められた「平家納経」には、青色の朝顔が描かれています。この頃になると朝顔が他の

植物と区別されたと考えられています。

○朝顔に大きな変化

その後の朝顔ですが、江戸時代(1600年頃)までは、突然変異で白い花をつけるなどの変化を起こすことはありませんでした。しかし江戸時代(1700年頃)、備中松山(現在の岡山県高梁市)で、黒白江南花と呼ばれるこれまでの朝顔とは全く異なり絞り染めのように色が出る「絞り咲き」の花が出現するという大きな変化が起きます。この突然変異については、現在は朝顔の詳細なDNAゲノム解析によって明らかにされています。朝顔のDNA配



アサガオの園芸品種「江戸風情」に見られる絞り咲き



列の中に「トランスポゾン(動く遺伝子)」が入り込んだり、抜け出たりした痕跡が残されています。このトランスポゾンにより朝顔の成長を制御する遺伝子がさまざまな影響を受けることで、花や葉の形や色も変化します。花の形を作る「おしべ」や「めしべ」にも変化が起き、形や機能も変わること朝顔とは思えないような形にまで変化を起こします。種子を作ることができない朝顔もできてしまいます。トランスポゾンは朝顔だけにある性質ではありません。ショウジョウバエの突然変異などもトランスポゾンによるものです。

○朝顔の栽培ブーム

絞り咲きの朝顔の栽培が関西に伝わり、その後江戸に伝わると当時の植木職や庶民の目にとまり、江戸時代には朝顔を栽培するブームが2度起こりました。

江戸時代1度目の栽培ブームは文化文政期(1804~1830年)です。1806年に起きた文化の大火で焼けた下谷一体の空き地で朝顔の栽培が行われ、江戸の人の観察眼に応えるためによりさまざまな品種が作りだされました。その後、江戸時代2度目となる栽培ブームが嘉永安政

期(1848~1860年)に起こります。この時期にはさらに珍奇なものが好まれ、花を付けても種を採ることができない異形の品種も作られるようになりました。当時はもちろん現在のメンデルの法則などは江戸の一般人は知りませんが、種子のできない珍奇な朝顔を栽培して自慢し合いながら楽しむことなどが盛んに行われていたのです。

明治時代になると伝統的な日本を否定する風潮から、朝顔の栽培も廃れる時期を迎えましたが、明治中期から昭和の初期にかけては3度目の栽培ブームとなり、散逸していた江戸時代に確立した品種を収集することも行われました。

戦争を経て、1948年(昭和23年)には、戦後のすさんだ世の中を少しでも明るくしようと入谷周辺で朝顔市が七夕の時期である6日から8日までの3日間に開催されることになりました。これをきっかけに全国で朝顔市が開かれるようになりました。

